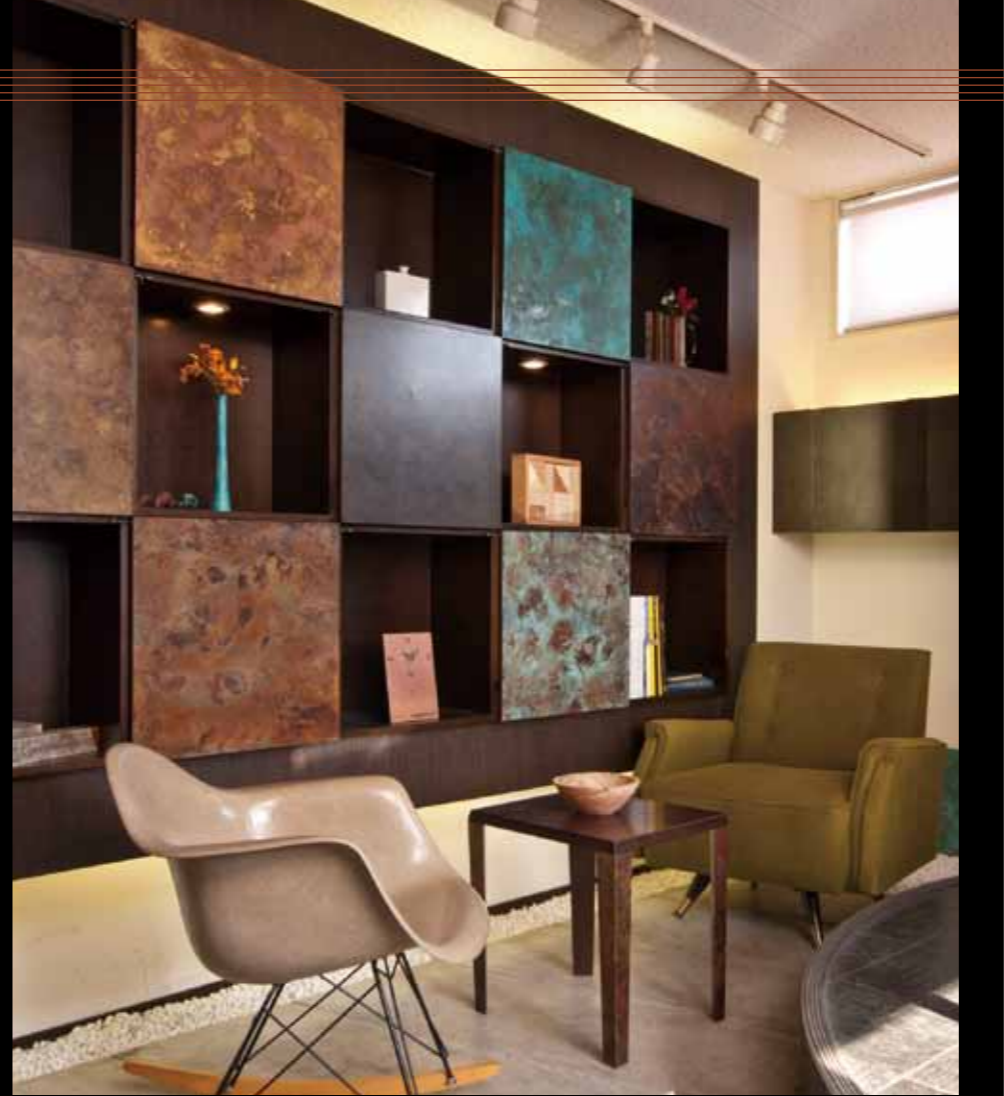


高岡銅器に新たなモメンタム

日用品から仏具、銅像、梵鐘まで、銅製鑄物の町として有名な富山県高岡市には、原型、鑄造、研磨、彫金、仕上げ、着色などの工房が多数あり、銅製鑄物の全国シェアの大半を占めている。だがバブル崩壊後、銅器そのものの需要が減少。販売額は徐々に下降し、平成15年には最盛期の約半分に落ち込んでいた。ところが最近、新しい分野の仕事が増。高岡市は「新しいものづくりの町」として全国から注目され、市をあげてPRを行い、県外からも若い職人が集まっているという。いま高岡市でなにが起きているのだろうか。

伝統技法を活かした未知の色で市場を拓く 高岡銅器に新たなモメンタム

昭和25年に創業した歴史ある折井着色所の名を、平成20年に「(有)モメンタムファクトリーOrii」へと変えたのは、三代目の代表取締役 折井宏司氏である。折井氏は、東京でコンピュータ関係の会社で働いていたが、家業が大変な状況になっていると聞き、Uターンを決意する。しかし着色技法の専門知識はまったくなく、市が開いた伝統工芸産業技術者養成スクールに参加し、一から学ぶことにした。ここで折井氏は、同じ想いを抱く若き職人たちと出会う。「仕事があるのをただ待っているのやめよう。仕事は自分で作る。高岡銅器の新たな魅力を創り出し、これまでは違う市場の開拓に、自分たちが動き出そう」とそんな仲間たちとチームモメンタムを結成。



工房の中には、建材やインテリアなど多彩な作品が展示されている



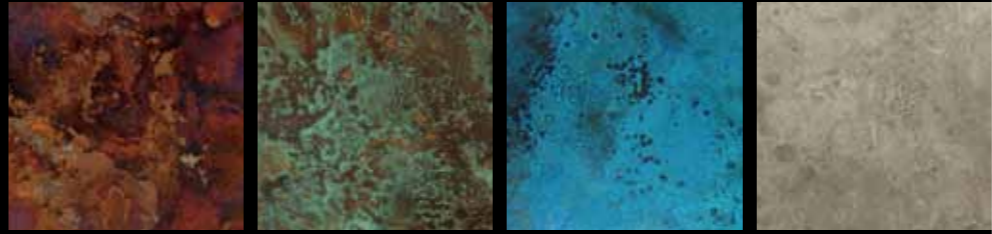
レストランの壁に使用された例



(有)モメンタムファクトリーOrii 代表取締役・伝統工芸士 折井 宏司氏



鮮やかな着色技法を活かした多彩な製品



斑紋孔雀色(材質:銅) 斑紋緑青色(材質:銅) 斑紋ガス青銅色(材質:銅) 斑紋純銀色(材質:銅、真鍮)

「魔法のように変化する 伝統の着色技法を実演」

「1mm以下の薄い銅板に柄、色を創り出します。新しく編み出した技法は、企業秘密ですでお見せできませんが(笑)、伝統の着色技法なら」と折井氏は、実演して見せてくれた。

●模様を出す技「糠焼き」



銅板に本物の糠みそを塗る



バーナーで真っ赤に焼く



糠みその燃えた跡が独特の模様になる

●着色する技「緑青色」



塩化アンモニウムや硫酸銅などの溶液から昇る気体に当てるだけで、見る見るうちに鮮やかな緑青へ変化。薬品の配合や温度で濃い青味、黄緑色などにもできる。

自分たちの手で飛躍する弾みを!

鮮やかな着色の製品が目にとまる。ギャラリーを運営する問屋グループのメンバー(株)竹中銅器に問い合わせると、その表面着色は「(有)モメンタムファクトリーOrii」の仕事だという。いま高岡市では、これまでになかった建築材やインテリアなどの新しいジャンルの需要が右肩上がりに伸びているが、その開拓者がOriiだと教えてくれた。

「モメンタム」とは、勢い、弾みの意味。既成概念を打ち破った高岡の新しいものづくりをスタートさせる起爆剤になる、そんな決意を込めた名前である。

折井氏は、いままでにない新しい色を表現できれば高岡銅器の魅力はもっと広がると、独自の発色に挑戦する。

「従来の方法ではシンプルな色しか出せません。そもそも、いろんな色を出す」という発想が、いままでなかった。ならば自分で創り出そうとしました。失敗ばかり。でも当時、半分素人の私に失敗はよくあること。伝統からちょっとかけ離れたアイデアも恐れず大胆に取り入れ、新しい色を編み出すことに成功できました。大切なのは、伝統技法をしっかりと身につけた上で、どう応用するかです」

こうして創り出したOrii独自の新しい発色を、いままでの高岡銅器の領域外である建築やインテリア、エクステリアなどの分野にプレゼンテーションしていく。「最初に大きな仕事が舞い込んだのは、建材メーカーから」

平成27年3月に開通した北陸新幹線ががやき号で東京駅から富山駅へ。ここまでわずか2時間15分。富山県も随分と近くなったものだ。後は、のんびりローカル線に揺られ高岡駅に到着。改札を出ると、券売機の横に高岡駅の発車音を澄んだ音色で奏でる銅合金の「おりん」を発見。他にも高岡市内を散策すると、懐かしい銅の看板建築の住宅や商店、また日本三大大仏の一つ高岡大仏、万葉歌人の大友家持の銅像など、銅と名のつくものをいたるところで目にする。さすが銅の町、高岡と感心しつつ、観光所・金屋町へ。ここには古き町並みが残り、高岡銅器400年の歴史を学べる高岡市博物館資料館もある。金屋町を訪れたもう一つの目的は、銅製品ギャラリー「KANAYA」をのぞくこと。銅を用いたお洒落なテーブルや食器などが並び、ひと味違った



お洒落な銅製品が並びギャラリー「KANAYA」



駅券売機横に設置された銅合金のおりん

ら依頼された六本木ヒルズの展望台フロア壁面、エレベータードア/内装のパネルです。その後、少しずつ建築内装の仕事が増え、この分野へのさらなる進出を目指しました」折井氏自ら企画・デザインし、時計などのクラフト品やテーブル天板に発色銅板を使った商品も製作。また、インテリア建築の展示会への出展、高岡銅器の魅力を伝えるための映像の制作、工場見学を積極的に受け入れるなどアピールも続けた。その努力が実を結び「高岡には面白い素材をつくる者がいる」と業界を超えて口コミで広がっていく。

「もっと広い分野で発色銅板を展開するには、より多くの作品が必要です。著名な作家やデザイナーに創作を依頼すれば話題性はありますが、その場で終わってしまうことが多い。継続することが大切ですが、自社には資金的にもその力はありません。そこでこの素材を気に入ってもらい、使い続けてもらうことが大事だと考え、これから活躍する若いデザイナーを起用することにしたのです」

それが功を奏し、いままでになかった顧客層やターゲットから発色銅板のニーズが増えてきた。

「私たちの作ったジュエリーボックスや手鏡を見たレストランのオーナーが、食器で使ってみようかと、こちらが驚くような依頼をされてきたのです。まだまだ高岡銅器の可能性は、膨らんでいきますよ。必要なのは、いま時代はなにを求めているのかをつねに考え、その変化にこたえる工夫を続けることです」

折井氏たちの起こした小さなモメンタムは、いまや高岡銅器復活の新たな奔流として広がりはじめています。

町の風景として溶け込む無数の「銅」



銅の町を象徴する観光名所金屋町